

野戦作井第二〇中隊の最後

高橋 喜久雄

本町五丁目

私は昭和十九年六月、終戦の時期が近づきつつある頃、市川市国府台東部第八五部隊へ補充兵として召集され、満足の教育も受けないうまま、野戦作井第二〇中隊の自動車手として沖繩へ派遣されました。

昭和二〇年三月末、米軍は沖繩へ上陸し激烈な戦闘が始まり、三か月の勇戦奮闘の末、守備せる皇軍十万は玉碎し、沖繩は米軍の手に渡りました。私は九死に一生を得、六名の戦友とともに帰還いたしました。

戦後三〇年もたつて妻とともに沖繩を訪れ、亡き戦友の霊を慰めて参りました。古戦場に立ち、沖繩で戦った部隊の行動や亡き戦友のありのままの姿を、永久に誰にも知らせずに終わってはならないと思い、私の体験した戦場の一端を書き残すべく筆を執りました。

南風原陸軍病院には、数百名の女子学生看護隊が衛生兵の手足となって、懸命に働いていた。ひめゆり部隊といわれ、戦傷

兵士たちから感謝されていた。南へ下る患者達を助け、あるいは薬品、衛生材料を担い、南へ南へと退っていった。しばらくして小録海軍部隊全滅、玉碎との報が入った。もう二、三日で、我が中隊も再び米軍と戦う時が近づいたと思い、陣地の補修に励んだ。中隊の陣地には電話もなく、もっぱら連絡兵と伝令にたよるだけで、たよらない思いだった。陣地の上空に、観測機が現れはじめた。近く砲撃がはじまる前触れだ。司令部より命令あり「東風平地区包囲されつつあり、南国吉方面に転進せよ。作井中隊は、歩兵第二二連隊の指揮下に入れ」。即刻残存の我が中隊の兵達は、下りはじめた。指揮する将校は一名もいなかった。戦傷者から先に壕を出発した。もうその頃は、逃げてくる住民と兵と一緒にいた。「兵隊さん、私達はどこへ逃げたらいいでしよう」と聞かれても返答に困った。「南の海岸の方へ向かいなさい」と無責任な返事しかできなかった。

下肢を両方切断され、両手に板きれを包帯で巻きつけ、へど口のような途を這って下っている兵もいた。盲目となった兵を

腕をつつた兵が助けながら歩いていった。糸満の付近まで退ってきた時、道路に女兒を背負い死んでいる母親を見た。近寄って見ると幼い女の子で、手足を動かしている。母親は艦砲でやられたらしく、胸がざくろのようにえぐれていた。この児だけは、見捨ててはいかれなかった。背負い帯を切り、抱き上げたが、泣き疲れたせいか泣きもせずおとなしかった。歩き始めたが、この児の処置に困った。しばらく行つてから、破れた民家の軒先に、中年の夫婦が休んでいるのを見つけた。訳を話し預かってくれるよう頼んだが、「困る、困る」となかなか承知してくれなかった。もう使うこともない百円札と、靴下に入れた二本の米と缶詰で話がついた。ほっとして銃を担ぎ直した。機関砲を荷車に積み、退ってくる海軍の兵に会った。小録の海軍陣地はどうしたかと聞くと、「司令、太田少将以下四千名全滅、残存兵にて南でもう一戦する」と、元氣のいい返事が返ってきた。工兵隊が怒鳴っている。「早く退れ、地雷を埋めるぞ。畑の中を歩け」。戦車防壁を石積みしている兵もいる。海軍といい工兵といい戦闘意欲旺盛、我々残存作井隊も頑張るぞ、と自分に言い聞かせた。国吉の陣地に到着したが、夜間のことで目的の壕が見つからず、苦勞した。南地区は未だ砲撃が少なく、畑にはキャベツがあった。兵達は、とびついてむさばり食った。国吉の壕は小さく、二十数名が入るほどではなかった。半数は近くの墓の中へ入った（沖繩の墓は横穴式のが多く、石灰やセメントで

固めてあり、人が十名位楽に入れる）。「墓の中で戦死すれば、世話がなくていいや」と誰か冗談をいったが、誰も笑えなかった。上級者は森田准尉だが、重傷で指揮はとれず、黒田軍曹が指揮をとることになった。立川航空隊の出身で、指揮班の兵器係であった。長身で、なかなかの美丈夫である。ときばきと兵達を指図し、頼り甲斐のある下士官であった。島尻の南側左翼糸満に敵上陸との情報あり、間もなく相方の銃声が聞こえるようになった。迫撃砲弾が落ち始めた。敵機より銃爆撃も始まった。遠雷のような音は艦砲だった。壕の内へ兵隊が飛び込んできた。下顎を吹き飛ばされ、舌がたれ下がって言葉にならず、アワワワワというだけだ。眼は何かを訴えている。よく見たら第二小隊の小島伍長だ。首里で、斬り込みに出たきり行方不明だった小島伍長だ。衛生兵の館村軍曹が、止血すべく三角巾で傷口をしばったがなかなか血が止まらず、間もなく眼をつり上げて息絶えた。中隊の戦友の前で戦死とは、運のいい人だ、と思つた。

こんなこともあった。どこかの中尉が壕へ入ってきた。眼つきが何となくおかしく、「お前達、俺に続いてついてこい」と大声をあげはじめた。よく観察すると、気が狂っているらしい。間もなく上半身裸体となり、抜刀して壕から出て行つた。戦場恐怖症とか。「もう沖繩でも大分出ているらしい」と館村軍曹はいった。

ターン、ターンと戦車砲の発射音が聞こえてきた。三〇〇メートルほど先の小高い丘に、M4らしい戦車が見え始めた。「応戦用意配置につけ」と黒田軍曹が命令を下した。各自に壕を出て地物を利用散開し、戦車を目標に小銃を射ちはじめた。敵歩兵の姿は見えないが、戦車の後方には必ずいるわけだ。機関銃弾が飛んでくる。頭を上げることもできない。迫撃砲弾が前方にガンガン炸裂する。破片が岩にあたり、カチンカチンと音がする。もうこれで終わりかという思いが、脳裏をかすめた。一発で死にたいと思った。みじめな負傷兵にはなりたくなかった。松の木を楯にして小銃を射っていた黒田軍曹が機関銃弾の右胸部貫通銃創で、くずれるように倒れた。内田一等兵、上田一等兵、古谷一等兵等は機関銃弾あるいは迫撃砲弾の破片を浴び即死した。負傷兵も多くなつた。戦場は砲煙につつまれ、地上には虫一匹生きていられないような状態になった。負傷兵を壕に収容し、どうやら満足な兵達も一刻壕に退避した。負傷兵達を衛生兵は必死になって止血するが、血は止まらず、次から次へと息絶えていった。壕内にじっとしていると、気が狂いそうだった。

夜になってやっと銃声が遠くなった。後方へさがろうと、黒田軍曹は命令したが、もう日本軍は追いつめられて、さがる陣地もなくなっていた。米須集落の向こうは、もう海だった。「軍司令部の八九高地は、未だ陥落してないだろう。麻文仁へ行こ

う」と誰かが言い出した。敗残の兵達は個々に国吉の壕を出はじめた。黒田軍曹も出血する傷をおさえながら下つた。指揮する上級者もなく敗残の兵達は、志気がなくなりつつあった。自分も同年兵の今井一等兵とともに国吉の壕をあとに出発した。歩き出すと左足が思うように上がらないのに気がついた。左の袴が血で濡れている。いつやられたのか負傷していた。左外股に迫撃砲弾の破片が入ったらしかった。真壁の自然洞窟を見つけた。そこは山部隊の歩兵二二連隊の指揮班の壕だった。将校が大勢いた。「所属を失った兵は、我が連隊の軍旗小隊に配属し、鈴木少尉の指揮下に入れ」と名も知らぬ中尉から命令された。他の部隊でも所属がきまり、ほっとした。伝令要員として、毎日砲煙弾雨の中を駆け歩いた。二、三日で、もう敵の攻撃を受けはじめた。戦車が現れた。「伝令はいるか？」の声に立ち上がると、砲兵団司令部への伝令だった。

「真壁集落西三〇〇敵戦車多数真壁集落攻撃中、砲撃されたし」
迫撃砲弾の落ちる中を今井一等兵と二名で飛び出した。もうその頃は負傷した傷が膿み始め、うずいた。夢中で、砲兵団司令部へたどりついた。気がつくのと、今井一等兵はついてこない。司令部に戦車攻撃を伝え、今井を待った。二時間近く司令部の壕で待った。電話線がきたらしく、保線兵が壕を忙しく出て行く。今井を待つのを諦め、司令部の壕を出て帰り道に今井一

等兵を探した。二、三〇〇メートル歩いて、畑の低い畔で倒れている今井を見つけた。迫撃砲弾の破片でやられたらしく、首の根元がえぐれて戦死していた。群馬県出身で、入隊前はトラックの運転手をしていたとか。申し訳に少しばかり土をかけ、別れた。これで中隊の仲間と別れ別れになり、自分一人になってしまった。淋しくなった。誰でもいい、中隊の仲間会いたいと思った。連隊の壕の付近まで来ると、壕の入口で黒煙が上がっている。火焰放射されているらしい。もう壕へは帰れないと思った。戦車防壁の陰にかくれ、これからいかにすべきかと考えた。無性に喉が乾いてきた。真壁の村はずれの水汲み場へ這っていった。迫撃砲弾の落下は相変わらず、ヒュルヒュルドカンと不気味な音を立てて炸裂する。水汲み場の洞の内には二十名位の兵と将校がいた。所属を失った敗残の兵ばかりだった。夕方になり敵機の飛行がなくなった頃、どこからともなく住民や兵達の水汲みにやってきた。何となく嫌な予感がして、洞の奥へ入り座ったとたん、ドカンと入口付近で砲弾が炸裂した。水汲みをしていた兵や住民達は吹っ飛んでしまった。しばらくは耳が聞こえなかった。負傷した兵も大分出たらしく苦痛を訴える声もする。誰もかまってはやれなかった。動物のように自分だけ生きて行くのが精一杯だった。銃を抱いて何となく眠ってしまった。「国頭突破だ。国頭突破しかない」の声が目が覚めた。よく聞いてみると、軍司令部よりの情報で残存兵は前線を

突破し、国頭の山岳部でゲリラに移るとか、水汲み場にいた兵達は皆その気になったが、小銃を持っている兵はいくらもいなかった。背の高い貨物廠の中尉が、「誰か国頭の地理に明るい者はいるか」と洞の内の兵達に聞いている声に、自分は名乗り出た。自動車を運転し、国頭、中頭、島尻を往復し地理に多少明るかった。「先頭に立ち案内せよ」との命令だ。砲撃の少なくなった頃を見はからい、水汲み場を出て麻文仁の軍司令部付近を見ると、麻文仁台上は砲撃の的になっている。海岸を行くしかない判断し、夜になるのを待った。点呼してみると、将校三名、兵七名であった。行動できそうもない兵も五、六名いた。足を射たれた兵が一名、水汲み場を這い出し砂糖黍畑の方へ行った。間もなくドカンと手榴弾の炸裂する音を聞いた。自爆したらしかつたが、見に行く勇氣はなかった。皆と行動を一緒に出来ないのを悲観したのだと思った。暗くなってから出発した。海岸に出るには米須の切り割を抜けるしかなかったが、切り割へ着いてみると切り割の向こうの海上より敵砲艦より機関砲の集中射撃だ。曳光弾を射っているので弾着はよくわかる。畑の溝に伏せて射撃の止むのを待ったが、止みそうにもないのだ。中央真栄平集落を突破し、進むことにした。国頭突破という目的があるせいか、将校始め兵達の行動はなかなか敏速だった。照明弾の打ち上がる戦場を姿勢を低くして進む。将校の軍刀が、ガチャガチャするので腰に差して貰う。突然左前方より、

敵の重機の一斉射撃にあった。ただ、頭を下げ、低いところへさがり、射ち止むのを待つ。斬り込みを警戒するためか、めちやめちやに射ってくる。隣にいた歩兵成田一等兵が、横に這おうといったので、銃を抱き、ごろごろと横に進んだ。すぐ後方で、ドカーンと砲弾が炸裂し、火柱が上がり、バラバラと土砂をかぶった。重機もなかなか射ち止まず、いくらも進めない。やっと台地の裾までたどりついた。この台地を登らなければ海岸には出られない。岩陰で点呼すると半数の五名しかいなかった。将校一名、兵四名だ。台上は砲撃により一本の樹も生えていない。姿勢を低くして登った。登り切ったとたんドカーンと砲弾が炸裂した。海岸側へ飛び下りた。脚の傷の痛みが激しく、思わずうなった。真つ暗な断崖をつかまりながら下りる。こんなところに沖繩名物ハブがいるだろうと思ったが、気にならなかった。

海面より二、三メートルのところまで岩がえぐれ、下りられなかった。成田一等兵が、海を泳ごうと言いだした。彼は北海道の漁師で、自信があると言う。銃を背に泳ぐ自信はなかったが、成田一等兵に続いて珊瑚礁の海に飛び込んだ。潮でかくれた岩にしたたか胸部を強打し、そのまま沈んでいった。これで終わりかという思いが脳裏をかすめたが、しばらくして浮き上がった。胸苦しく、息をするのがやっとだった。夢中で泳いだ。五、六メートル先に岩が見える。やっと泳ぎついた。成田一等兵は

もう十メートル先を泳いでいる。胸の痛むのを我慢して泳いだ。一緒にいた連中の何人か、ついてくるらしい。断崖沿いに岩につかまり、深みは泳ぎ、一晚中敵の後方へ出るべく泳いだ。夜が白々と明け始めた。断崖の下に大きな空洞を見つけ、この断崖の上だ。先着が三名ほどいた。貨物廠の兵達だった。この断崖の上で敵が居り、時々射ってくるので行動ができず、もう二日もここにかくれていると言う。

「何か食うものはないか」と、体格のよい軍曹が手を出した。雑のうには米も乾パンもあったが、米も乾パンも海水でふやけ、食べるものではなかった。底の方に鯉節があった。帯剣で削り分け、食べたが、ほどよい塩味で旨かった。朝になっても真壁と一緒に大将校や兵も、この洞には現れなかった。断崖の下を見ると、住民や兵隊の屍体が数えきれないほど浮いていた。「もうじき砲艦が、やってくるぞ」と先着の軍曹は言った。洞の内で二人は死んだように眠った。考えて見れば、今までもろくに寝ていなかった。このまま砲弾で吹き飛ばされてもいいと思った。——どの位寝たかわからなかったが、夢うつつのうちに日本の流行歌を聞いた。まさかこんなところで……、と眼を覚ました。段々に歌声が近づいてくる。拡声器からの声だ。敵の砲艦が現れた。一〇〇メートルほど海岸から離れてゆっくり走っている。歌声はそこからだった。「日本の兵隊さん、武器を捨てて出てきなさい。戦いは終わりました。食べ物もありま

す。煙草もあります。出てきなさい」と歌声が止むと同時に二世みたいな舌足らずの日本語が聞こえた。騙されてたまるかと思ひながら、懐かしい歌をもう一度聞かせて欲しい気がした。

二、三発小銃の音がしたとたん、砲艦より機関銃のお返しがあった。やはり我々を騙しているんだと思ひ、洞の低い位置へ伏せた。跳弾に当たるのは嫌だ、と思つた。跳弾に当たれば必ず盲貫となり苦しむだけだ、と思ひながら伏せていた。砲艦は機関銃を打ちながら去っていった。貨物廠の兵が、どこから持ってきたか黒っぽい地方人の着物と着替へはじめた。「住民の服装をしていれば、射たれないだろう。今夜出發だ」——薄暗くなつてから洞を個々に出ていった。続いて我々二人も海に入った。波で岩に打ちつけられないように泳いだ。軍装したままの泳ぎはつらかった。苦しくなると岩につかまり、また泳ぐ。特攻機が攻撃しているらしく、遠くの海上に火花のような弾幕が見える。

六月の沖縄の海とはいへ、長く海につかつて身体は冷えきつた。早く敵の後方へ行き、陸に上がりたいと思つた。眼の前に男の子の屍体が流れてきた。戦争さえなければ、死なないうですんだのにと戦争の悲惨さをつくづく感じた。一生懸命泳ぐが、岩につかまっている時間が段々長くなる。漁師上がりの成田一等兵は、どんどん先を行くが、ついて行くのに骨がおれた。長い夜が明けてきたので、陸に上がる場所を海の中から探した。

成田が、はるか前方の岩かげから手まねきをして待っていた。麻文仁の断崖はもう終わりに近く大分低く見える。二人で低い崖を上がると一面の砂糖黍畑で、ところどころ焼け残っている場所があつたので、そこへ潜んだ。太陽が上つてきたので付近をさぐってみると驚いた。敵の迫撃砲の陣地のすぐそばだった。上半身裸体となつた米兵が作業するのが見える。これでは昼間の行動はむずかしいと畑に伏せ、夜になるのを待った。米陣地に近いせいか、弾丸は飛んでこない。空には敵機がブンブン飛び回っていた。遠くで重機の音が聞こえる。知らぬうちに二人とも眠ってしまった。——誰か胸をつつくので眼を開けて見て驚いた。六尺もあるような大男の米兵が、銃の先で胸をつついていてではないか。「射たれる」と冷たい恐怖が背筋を走つた。「へい、スタンダップ」二人とも五、六名の米兵に取り囲まれ、身体検査をされジープに乗せられた。どこか山の方へでも行つて銃殺か。「生きて虜囚の恥かしめを受けるなかれ」の教えが思ひ浮かび、どこで殺されようが本望だと諦めた。どこへ連れていくのかジープはなかなか止まらず、途中砲弾の空薬莖が山のように捨ててあるのを何か所も見た。負けたという実感が心からわいた。左に飛行場が見え、嘉手納だと気がついた。鉄条網で囲つた捕虜収容所にやっと到着し、素裸にされ身体を洗へと手まねで米兵は指示する。身体を洗い終わると負傷した股の傷を手当してくれた。殺さない気だなどと思つた。しかし、

中隊で一人だけ生き残り、捕虜となつては二度と内地の土は踏めまいと覚悟を決めた。収容所の中で黒田軍曹に逢つた。手を握り二人とも泣いた。あまりにも懐かしく、血を分けた兄に逢えたような感情だつた。収容所で館村軍曹にも逢えた。次から次へと生き残つた戦友が現れた。森軍曹は終戦後一年もたつて捕虜となつた。昭和二十一年十一月に復員するまで、他にはもう誰も生きては現れなかつた。

